

「シンポジウム44のチャットに入力された質問内容と回答について」

質問者 A

Q：当院では糖尿病薬全般を一包化の際、別包としています。シックデイや検査前などに休薬しやすいよう、また患者の薬剤認識向上が理由です。しかし、昨今低血糖リスクの少ない糖尿病薬が増えてきたことや別包となると薬袋数が増えてむしろノンコンプライアンスを招く懸念もあり、調剤方法に悩んでおります。

皆様の施設では一包化の際に工夫していることはありますか？

A：ご質問とコメントを有難うございます。糖尿病患者さんの高齢化や在宅管理などで糖尿病薬の一包化指示が出されることが多くなりました。糖尿病専門医の受診ですと、糖尿病薬を「別包」の指示で処方されたり、疑義照会で別包へのご理解が得られたりすることが多いようです。しかし、食前薬や低血糖の可能性のあるSU薬やグリニド薬など別包が増えて複雑になりますと、先生のご指摘の通りにアドヒアランス低下になりかねません。では、低血糖の危険が少ない糖尿病薬は一包化して良いかという点、シックデイ時などには、脱水防止で休薬する糖尿病薬もあり、糖尿病患者さんの一包化は簡単にこうすれば良いという方法が見つかりません。

現状では、処方されている糖尿病薬の中でシックデイや食事摂取量減少時の服薬で、減薬や休薬が必要なものを患者さんまたは介護者に把握ができるようにして、それらをイベント時に一包化の中から取り出せるように、どのようにするかだと思います。別包もひとつの方法であり、他にも工夫されているご施設もあると思います。これらの情報を収集して、糖尿病薬の一包化ではこのような方法もあるという事例を、学会としてでもご紹介できるようにしたいと思います。

(クラフト株式会社 佐竹正子)

質問者 B

Q：ライフスタイル、糖尿病薬の効果検証するうえでは、今後CGM、リアルタイムCGMを活用しての血糖変動を『見える化』するうえでも有効なツールだと思っています。

治療指導の最前線でご活躍の先生方のご意見をお伺いできれば幸いです。

A：ご質問ありがとうございます。リアルタイムCGMで血糖値が簡易に見える化できることで、食事・運動などの生活習慣が改善し、血糖値が改善することが報告されています。さらに、それに伴う自己効力感の向上にも役立つことも併せて報告されています。薬物療法においては、血糖値のトレンドをみることが出来ますので、低血糖の予防にも役立つものと考えられます。一方で、マンネリ化することも報告されており、生活習慣の改善など

は長期間継続できないこともわかっていますので、CGMの結果を上手に活用した服薬指導と薬物療法の構築について、薬剤師が積極的に介入することで、より効果的な糖尿病治療を実現することができるのではないかと考えています。詳細は、「インスリンポンプ療法、各種検体検査機器使用における薬剤師の関わり方」をご参照ください。

(北里大学薬学部 堀井剛史)

質問者 C

Q: 働き盛りで、付き合いでの外出が多い患者様(女性)の場合、どのタイミングでインスリン注射を行ってもらえばよいか毎回指導に悩んでいます。

先生の場合、どのように指導されますか？

A: ご質問ありがとうございます。外出時にどのように自己注射を行うかは、重要な問題です。ポイントは①インスリンの作用発現時間を考慮すること、②提供される食事(糖質)の量とタイミングを予測すること、③どこで自己注射を行うかを予め想定しておくことではないかと思います。①に関しては、最近、超速効型インスリンに加えて新規超速効型インスリンが登場していますので、「食直前」「食中」「食直後」に注射が可能になってきています。ですから、その患者さんの使用している(追加)インスリン製剤を確認して、注射と食事のタイミングを考慮した説明が可能だと思います。②の食事が提供されるタイミングですが、主に炭水化物が提供されるタイミングを考慮することになります。ただ、①にも示しましたが、超速効型や新規超速効型インスリンでは食事が提供されてからでも可能なので、あまり神経質にならずに食事前の雰囲気を楽しむよう勧めます。③の注射の場所ですが、もちろん客席での注射も可能ですが、トイレの中が人目を気にせずに気兼ねなくできそうです。こんなことを患者さんと一緒に確認してみたいかがでしょうか。詳細は「適正なインスリン注射製剤使用の継続的薬学管理のてびき」「インスリン製剤の適正な継続的薬学管理に必要な視点と行動例」「適正な糖尿病薬物療法のための低血糖対策支援のてびき」を参考にしてください。

(新潟薬科大学薬学部 朝倉俊成)

質問者 D

Q: 血糖降下薬をほぼ全種類併用されている場合、1種類ずつシックデイ時の対応をお伝えしていますか？

患者様が高齢であったり理解力があまいだったりとか大まかにしか説明できない時があります。

A: ご質問有難うございます。糖尿病薬の内服剤が数種類処方されている場合でも、シックデイ時の減量については患者さんに説明していました。説明方法は「お薬情報」にシックデイ時に飲むか飲まないかを説明して、患者さんと確認しながら記入していました。ただ、

これを毎回するのではなく、少なくとも1年に1回は患者さんと一緒に確認していました。患者さんの中にはシックデイ時の注意を聞いて下さらない方もいらっしゃいましたが、「もしもの時はこれを見て」と話して、お薬情報に減量や休薬について書いていました。それを医師と患者さんと薬剤師との情報共有目的で作成したのが、シックデイカードでした。また、SU薬やグリニド薬は食事量にあわせて糖尿病薬を減量しますが、1/2 食べたか 1/3 食べたかの判断は、高齢者などでは難しいところがあると思います。糖尿病関連図書では、食事量を 2/3 以上、1/2 程度、1/3 以下の分類が多いのですが、患者さんには、ある程度食べられると思ったら飲む、食べられそうにないと思ったら飲まないなどの単純な説明のほうが、病気の時以外の食事量が減少するイベント時に慌てず判断できるようです。医師によっては、「シックデイ時は休薬で水分確保」の説明をされている場合もあります。説明の仕方は、患者さんの年齢や独居（独身）かどうかなど生活背景を考慮して行うことが良いと思います。

（クラフト株式会社 佐竹正子）

質問者 E

Q：地域の医師が専門医ではない状況でもシックデイ時の薬の調整などで「てびき」は活用できますか？

A：ご質問有難うございます。かかりつけ医が糖尿病専門医でない場合、なかなかシックデイ時の減薬量の指示をいただけない場合があります。シックデイ時の減薬量は「医師の指示」が今のところ原則ですので、まずかかりつけ医に患者を通して確認していただくか、トレーシングレポートなどで確認するようにしましょう。これらをして減薬量の指示が出ない場合に、「てびき」の表などを参考に、医師へ減薬量を提案する方法もあると思います。これらの経過を経るためには、シックデイ時の減薬量は「健康な時」からの対応が必須になります。

地域の患者さんを守るためにも、薬局薬剤師がシックデイの対応方法に取り組んでいただけることを期待しております。

（クラフト株式会社 佐竹正子）

質問者 F

Q：薬薬連携における情報の共有はなかなか進まないのが現状ですが、今後のIT化によるDXの進化も待たれます。現状では、外来ではトレーシングレポートによる情報提供は有効ですがあまり活用されていないのが実情です。入院に関しては、保険薬局では知らないうちに入院、退院しており入院中の情報が全く分からない状況です。連携を充実させるうえで何か良い手法があればご指導いただけますでしょうか。

連携手帳の活用もよいと思うのですが、残念ながら専門医ですらほぼ使われておらず、ましてや患者から見せられたことすらありません。

A：ご質問ありがとうございます。勿論オンライン資格確認や電子処方箋などによるDX化が進むと医療情報や併用薬などの共有も進むことが期待されています。薬機法改正にみられるように、ポリファーマシーになりやすい糖尿病のかかりつけ患者さんの残薬や服薬状況の把握や入退院前後の連携とフォローは、薬剤師の大切な役割となってきました。

トレーシングレポートに関して、何をフォローし、何を書けば良いかわからない、何か良い手法はないかという質問を他の先生からも同様に頂く事があります。

是非、くすりと糖尿病学会（くすりと糖尿病 vol.10 Suppl.2021）の糖尿病薬物療法 継続的薬学管理のためのてびきの第2章 糖尿病患者の継続した薬学管理に用いる様式とその活用でのびき、入退院及び在宅への連携であれば 第8章 在宅医療における糖尿病患者の継続的薬学管理を参照頂けると幸いです。巻末には、実際の医師へのトレーシングレポートに使用できる情報提供、継続管理シートの様式も最後のページに添付しておりますので、ご活用頂けると幸いです。

お薬手帳は普及していますので、退院時指導の際には、お薬手帳に、薬学管理サマリーと糖尿病患者管理シートのチェックポイントを添えて、フォローして頂きたい点を明確にして頂けますと薬局薬剤師は、それに従ってフォローし、必要な服薬指導が可能です。その内容を「てびき」にある情報提供の書式にチェックポイントを付けた上で、トレーシングレポートにし、医療機関にフィードバックできます。

地域連携を進める上で、情報提供の薬局⇄病院間の流れや院内の流れについては、地域の薬薬連携の勉強会などでプロトコルや流れを検討し、地域ネットワークでの顔の見える連携が構築されるとより情報連携がスムーズになると存じます。

「てびき」の視点に立った情報提供の在り方について、今後もくすりと糖尿病学会のてびきセミナーや行動開発セミナーを実施していく予定ですので、是非ご参加いただくと幸いです。

（薬局恵比寿ファーマシー 篠原久仁子）

質問者 G

Q：自宅は認知症カフェをしております病院薬剤師です。開局薬局コロナの影響により在宅訪問が難しく成りました。フォローアップテレホンサービスをしておりますが、まだまだ難しい環境です。

長時間訪問できないため、オンライ服薬指導に必要なものは何かご指導を頂けますか？

A：ご質問ありがとうございます。認知症カフェも併設されておられるとのことで、貴薬局ご利用の患者様や在宅対応の患者様では、認知機能低下に伴う服薬指導に細やかな配慮が必要な状態が推察されます。

そのような患者様では、電話でのフォローは、ご本人様と話しても指導したインスリン単位変更を忘れてたり、日中高齢者の独居となり、基本電話に出てもらえない事や、薬の飲み忘れの有無など服薬状況が見えない、高齢者では自覚症状の訴えに乏しいため、低血糖や

高血糖であっても、発見がしにくいなども指摘されています。

一方で、コロナ禍で頻回訪問も困難なため、糖尿病患者の継続管理シートに従い、画面越しにご本人の体調、薬の残薬や自宅での管理の様子が確認できるとう点で、オンライン服薬指導のメリットがあります。オンライン服薬指導専門のツールでなくても、操作できる家族がいれば Skype や zoom、Line など使ったオンライン服薬指導や自宅での血糖や血圧などの検査値を薬局パソコンと同期し、自動で投与後血糖モニタリングを見える化できる、シンクヘルスというツールなどもあります。

薬剤師が頻回に訪問できなくても、訪問看護師さんやヘルパーさんらと情報共有し、多職種で連携し情報共有する方法も考えられます。

是非、くすりと糖尿病学会（くすりと糖尿病 vol.10 Suppl.2021）の糖尿病薬物療法 継続的薬学管理のためのてびきの 第 8 章 在宅医療における糖尿病患者の継続的薬学管理を参照頂けると幸いです。

（薬局恵比寿ファーマシー 篠原久仁子）

質問者 H

Q：日本赤十字社に勤務する病院薬剤師です。東日本大震災時には 10 ヶ月間継続的に支援薬剤師を送りこんでおります。ブドウ糖の件に共感しました。グルカゴン点鼻薬の位置づけはどうされますか、お伺いします。

学校薬剤師もしていますが勤務地域では医師会、学校薬剤師と協力した中学校を災害時拠点とするために毎年合同訓練したり、コロナウイルス感染症ワクチン接種支援をしたりしています。

A：質問ありがとうございます。低血糖対策支援のてびき（てびき集 p135）にも記載がありますが、自分でブドウ糖を経口摂取できず、第三者による介助が必要な場合には、グルカゴン製剤（筋肉注射、点鼻製剤）を渡しておく必要があります。グルカゴン点鼻製剤は静脈注射に比べて操作が簡単なので無自覚性低血糖の対処には有用ですし準備しておく意義があると考えます。その際に、点鼻操作を行う第三者（同居家族や学校関係者など）に十分な指導・説明を行うことが重要です。

（陣内病院薬剤部 西村博之）